

これも結論だけを先に述べるが、さまざまな研究を総合して推計された統合失調症の遺伝率は双極性障害（躁うつ病）と並んできわめて高く、80%を超えている（統合失調症が82%、双極性障害が83%）。遺伝率80%というのは「8割の子どもが病気にかかる」ということではないが、身長遺伝率が66%、体重の遺伝率が74%であることを考えれば、どのような数字かある程度イメージできるだろう。**背の高い親から長身の子どもが生まれるよりずっと高い確率で、親が統合失調症なら子どもも同じ病気を発症するのだ。**

犯罪心理学でサイコパスに分類されるような子どもの場合、その遺伝率は81%で、環境の影響は2割弱しかなかった。しかもその環境は、子育てではなく友だち関係のような「非共有環境」の影響とされた。

この結果が正しいとすれば、**子どもの極端な異常行動に対して親ができることはほとんどない**。親の「責任」とは、たまたまその遺伝子を自分が持っており、それを子どもに伝えたということだけだ。

誰でも知っているように、身長の要因には遺伝と環境がある。両親ともに背が高くても、幼児期の栄養状態が悪ければ身長は低いままかもしれない。だったら、遺伝（あるいは環境）の影響はどのくらいあるのだろうか。

これを調べたのが遺伝率で、「**身長遺伝率66%**」というのは、**背の高さのばらつきのうち66%を遺伝で、34%を環境で説明できる**ということだ。

よくある誤解は、遺伝率を個々の確率と取り違えることだ。身長遺伝率は、「背の高い親から66%の確率で背の高い子どもが生まれ、34%の確率で子どもの背は低い」ということではない。

「ここは空白の石板（ブランク・スレート）」というのがリベラルの立場で、子どもはみな平等に生まれてくるが、環境によって知能の差が生じると考える。日本でも「親が高収入だと子どもの学歴が高い（貧しい家庭の子どもは良い教育を受けることができない）」といわれるが、これが典型的な「**環境決定論**」だ。

ところが行動遺伝学の双生児研究などによって、「知能が環境のみによって決まる」という仮説は完膚なきまでに否定されてしまった。言語性知能は家庭環境の影響を強く受けるものの、それを除けば、一般知能の8割、論理的推論能力の7割が遺伝で説明できるなど、**認知能力における遺伝の影響はきわめて大きいのだ**。

「相関関係があるからといって因果関係があるとはかぎらない」というのは統計学の基本だ。

アイスクリームの売上と水死者の数を調べると、どちらも季節によって同じように増

減する。だがこの相関関係から、「アイスクリームが水死の原因になる」という因果関係を導き出すひとはいないだろう。アイスクリームがよく売れるのは夏で、海やプールの事故が起きるのも多くは夏だ。「夏の暑さ」という共通の原因によって、アイスクリームと水死者の相関関係が生じるのだ。

じつは、親の収入と子どもの学歴にも同様の「擬似相関」がある。知能が遺伝するという事実を受け入れるならば、「知能の高い親は社会的に成功し、同時に遺伝によって子どもは高学歴になる」という因果関係ですっきり説明できるのだ。

~~~~~

擬似相関（ぎじそうかん、英: Spurious relationship, Spurious correlation）は、2つの事象に因果関係がないのに、見えない要因（潜伏変数）によって因果関係があるかのように推測されること。

~~~~~

アメリカの建国の理念は、西部開拓時代に培われた「自助自立」だ。政府は市民の生活に最低限の関与しかしてはならず、市民の義務は税の使い道を厳しく監視することだ。こうした市民主義の立場からすれば、巨額の税を投入するヘッドスタート・プログラムに計画どおりの効果があるかどうかは重大な政治的関心事となる。

ジュンセンの支持者たちは、ヘッドスタートが**貧困家庭の子どもたちのためではなく、税金に群がる教育関係者の巨大な利権になっている**と批判した。その効果が科学的に検証できないにもかかわらず、毎年多額の連邦予算を計上しているのは、既得権層の役得を税によって支えるためなのだ。

アシュケナージは「ドイツの」という意味で、ライン川沿いのユダヤ人コミュニティを発祥とし、その後ポーランドやロシアなど東欧諸国に移り住んでいった。

オスマン帝国のようなイスラーム圏で暮らしていたユダヤ人に比べて、アシュケナージには際立った特徴があった。ヨーロッパにおける激しいユダヤ人差別によって人口の増加が抑えられていたことと、キリスト教で禁忌(きんき)とされていた金貸しで生計を立てざるをえなかったことだ。こうした条件にユダヤ教独特の他民族との婚姻の禁忌が加わると、数十世代のうちに知能に関する遺伝的な変異が起きてもおかしくはないとコ克蘭とハーペンディングは述べる。

多くの**最貧困女子**取材した鈴木は、そこには「3つの障害」があるという。それは**精神障害、発達障害、知的障害**だ。これは現代社会の最大のタブーのひとつで、それを真正面から指摘したことは高く評価されるべきだろう。

最貧困女子はなぜ、地元を捨てて都会に出てくるのか。その理由は、(不幸な生い立ちなどがあるとしても)「3つの障害」によってつき合うのが面倒くさく、「仲間」から**排除される**からだ。

ところが現在、日本社会の最貧困層の生態系に大きな変化が起きている。少子高齢化と価値観の多様化（若い男性の草食化）によって、風俗の市場が大きく縮小してしまったのだ。同時に、**女性の側に「身体を売る」ことへの抵抗がなくなって風俗嬢志望者が激増した**。需要が減って供給が増えたのだから、当然、**価格は下落する**。

これが「セックスのデフレ化」で、かつては月 100 万円稼ぐ風俗嬢は珍しくなかったが、いまでは指名が殺到する一部の風俗嬢の話でしかなく、地方の風俗店では週 4 日出勤しても月額 25 万円程度と、コンビニや居酒屋の店員、介護職員などとほとんど変わらないという。

貧困線上にある若い女性にとってさらに深刻なのは、景気の悪化によって風俗業界が新規採用を抑制するようになったことだ。そのため現在では、10 人の求人のうち採用されるのはせいぜい 3~4 人という状況になっている。日本社会は（おそらく）人類史上はじめて、若い女性が身体を売りたいくても売れない時代を迎えたのだ。

このようにして、地方から都会にやってきた若い女性のなかにセックスすらマネタイズできない層が現われた。彼女たちは最底辺の風俗業者にすら相手にされないので、インターネットなどを使って自力で相手を探るか、路上に立つしかない。それでもじゅうぶんな稼ぎにはほど遠く、家賃滞納でアパートを追い出され、ネットカフェで寝泊りするようになる——すなわち「最貧国女子」の誕生だ。

最貧国女子は「3つの障害」によって、社会資本（家族や友人）も金融資本（貯金）もほとんど持っていないため、人的資本（仕事）を失うとあつというまに社会の最底辺に堕ちてしまう。日本においても、**知能の格差が経済格差として現われているのだ**。

もちろん、反社会的な子どものすべてが心拍数が低いわけではない。そこで、レインは、15 歳のときに反社会的な態度をとって、29 歳までに犯罪者になった者と、成人後に反社会的にも犯罪者にもならなかった者とを比較してみた。その結果、犯罪者にならなかったグループは、犯罪者になったグループに比べて安静時心拍数がかなり高いことが判明した。**心拍数の高い子どもは、非行に走ったとしても大人になれば更生するのだ**。

ラジ（少年）とジョエル（少女）は、被験者のなかでもっとも心拍数が低く、最高レベルの刺激追求度と恐怖心のなさを示していた。

少年ラジは成人すると、盗み、暴行、強盗などの罪状で有罪判決を受けた。彼は**典型的なサイコパスで、他人を恐れさせ、従わせることに快楽を覚えた**。「暴力の犠牲者を気の毒に思うことはあるか」と訊くと、「ない。良心を求めているのはやつらで俺ではない」とこたえた。ラジにとって、人生は快楽と興奮を求める制限のないゲームだ。

この発見は、幼少期における自律神経系の恐怖条件づけ機能の障害が、成人犯罪を導く因子として作用し得ることを示唆している。「**発汗しない子ども**」は、**親がどれほど**

厳しくしつけても、良心を学習することができないのだ。

一般集団における**男性の反社会性パーソナリティ障害の基準率は3%**

また胎児期のニコチンへの暴露はノルアドレナリン系への発達を阻害し、交感神経系の活動を損なう。その結果、自律神経の機能が低下し、安静時心拍数が低くなり、覚醒度の低い、常に刺激を求める子どもが生まれる可能性も指摘されている。

一方、妊娠中に母親がアルコールを大量摂取すると、胎児性アルコール症候群と呼ばれる障害が引き起こされる。その特徴は頭蓋顔面の異常で、顔の中央部は比較的平らで、上唇はきわめて薄く、両目の間隔が大きく離れているケースが多い。

広く知られているのは人差し指と薬指の比率で、女性はその長さがほぼ同じだが、男性では薬指が長いことが多い。人差し指と薬指の長さのちがいは、テストステロン値が高いほど大きくなる。

同様の特徴が、顔の長さとの比率についても観察されている。テストステロンの濃度が高い男性ほど顔の幅が広くなり、攻撃的な性格が強くなるのだ。——誤解のないようにいっておくと、これはあくまで「平均的な男性」のことで、幅広の顔の男性がすべて暴力的だというわけではない。

アメリカの研究では、銀行が窓口担当者と融資の査定担当者を募集するとき、**童顔の男性を窓口担当者に、大人びた顔の男性を査定担当者にすることが多い**。大人びた顔のほうが、「決断力があり、時に非情な態度もとれる」ように見える。融資を受けようとする側は必死だから、童顔の担当者では足元を見られて押し切られてしまうと懸念するのだ（これはおそらく日本でも同じだろう）。

銀行業務では、窓口よりも融資の査定担当のほうが地位も給料も高いのがふつうだから、**童顔の男性は外見だけで「非情さに欠ける」と判断され、割を食うことになる**。

だが反対に、童顔で得をすることもある。

アメリカの裁判の判決と被告の容貌を比較した研究では、童顔の男性にカネを騙し取られたと訴えたとしても、多くの場合、敗訴することがわかっている。

オプトアウト（自らの意志で仕事から身を引く）

「男はモノを相手にした仕事を、女はひととかかわる仕事を好む」というキブツの大規

模な社会実験の結果は、男女の志向のちがいが（男性中心主義的な）環境ではなく、脳の遺伝的・生理的な差から生じることを示している。男らしさや女らしさは進化が生み出した脳のプログラムなのだ。

女性が乳幼児に授乳や養育、保護などを行なうとオキシトシンというホルモンが分泌される。オキシトシンはモルヒネ様ホルモンで、その効果によって女性は「満ち足りた事幸福感」を味わう。

男と女の脳には生得的なちがいがあり、その結果、男の子と女の子では見え方や聞こえ方がちがい、遊び方がちがい、学び方がちがい、けんかの仕方や世界の見え方もちがう。だとしたら、男の子と女の子はそれぞれの適性に合わせ、別々の学校で教育したほうがずっと自然かもしれない。

一方、男の子にとっても、他の男の子がガールフレンドとセックスしているのに、自分だけがセックスできないと、グループ内での地位が危機にさらされることになる。当然彼は、「愛情の証」として、執拗にガールフレンドにセックスを求めるようになるだろう（なんといっても、彼女の友だちはボーイフレンドに身体を許しているのだ）。そうなる彼女、友だちグループの関係を壊さないために、それを受け入れるしかなくなる。共学では、こうした「社会圧力」が望まない妊娠へとつながっていくのだ。

精神分析学を創始したフロイトは、ひとは性的欲望を無意識に抑圧していると考えた。エディプスコンプレックスでは、男の子は母親との性交を望むが、父親によってその欲望を禁じられ、去勢の恐怖に怯えるのだ。

だがいまでは、こうした「お話」はすべてデタラメだとわかっている。

...

エディプスコンプレックスはフロイト理論の根幹で、それがウソだったのだから、精神分析は擬似科学でしかない。しかしそれでも、フロイトはきわめて重要な洞察をしている。それは、人間が「性」にとらわれているということだ。

17世紀の魔女狩りの時代になるとクリトリスは「悪魔の乳首」とされ、クリトリスの異常に大きな女性はそれだけで火あぶりにされた。だがこれを愚かな迷信と笑うことはできない。

1858年、イギリスの婦人科医でロンドン医師会会長だったアイザック・ベイカー・ブラウンは、女性のマスターベーションはヒステリーや脊髄の炎症を引き起こし、それがてんかんや痙攣につながって痴呆や操状態を発症させ、最後は死に至ると主張し

た。そしてブラウンは、この悲劇を防ぐもっとも効果的な方法はクリトリスの外科的切除だとして、数え切れないほどのクリトリス切除手術を施した。

幸いなことにこの「理論」には根拠がないことがわかり、ブラウンはロンドン産科学会から除名され、クリトリス切除はイギリスでは行なわれなくなった。だがその間にブラウンの著作はアメリカで大きな評判を呼び、20世紀に入るまで、ヒステリーや色情狂、女性のマスターベーションの治療法としてクリトリス切除が実施されつづけた——1936年になっても、『ホルトの小児科学』という権威ある医学教科書で、少女のマスターベーション治療としてクリトリスの切除ないし焼灼(しょうしゃく)が推奨されていた。

こうした興味深い性の歴史をたどりながら、ライアンとジュタは次のように問う。「通説」がいうように女性の性的欲望が弱いのなら、なぜこれほど執拗に女性の快楽を抑圧し、オルガスムを罰しなくてはならなかったのか——。

ヒトの本性が乱婚だというきわめて説得力のある証拠のひとつが、男性器の構造だ。ヒトのペニスは乱婚のチンパンジーやボノボよりも長く、太く、先端にエラがついている。これまでの通説では、ペニスがこのような特徴的な形状を持つようになった理由をうまく説明できなかった。

だがヒトのペニスの機能は、かんたんな実験で明らかになった。ペニスと同じかたちをしたものをゴムの管のなかで激しく動かすと、管のなかに真空状態が生じ、内部の液体が吸い出されるのだ。

男性のペニスと性行動は、その特徴的なかたちとピストン運動によって、膣内に溜まっていた他の男の精液を除去し、その空隙に自分の精子を放出して真っ先に子宮に到達できるよう最適化されているのだ。

男性が短時間でオルガスムに到達するのは、女性が大きな声をあげる性交が危険だからだ。旧石器時代の男にとっては、素早く射精することが進化の適応だった。

それに対して女性には、大きな声をあげることに、身の危険を上回るメリットがあったはずだ。それは、他の男たちを興奮させて呼び寄せることだ。これによって旧石器時代の女性は、いちどに複数の男と効率的に性交し、多数の精子を膣内で競争させることができた。そのためには、よがり声だけでなく、連続的なオルガスムが進化の適応になるにちがいない。

しかしここには、私たちの社会がどうしても認めることのできない「残酷すぎる真実」が隠されている。それは、**子どもの人格や能力・才能の形成に子育てはほとんど関係ない**、ということだ——だからこそ、別々に育っても一卵性双生児は瓜二つなのだし、双生児研究において共有環境の寄与度がほとんど見出せないのだ。

勉強だけでなく、遊びでもファッションでも、**子ども集団のルールが家庭でのしつけ**

と衝突した場合、子どもが親のいうことをきくことはぜったいにない。どんな親もこのことは苦い経験として知っているだろうが、ハリスによってはじめてその理由が明らかになった。子どもが親に反抗するのは、そうしなければ仲間はずれにされ、「死んで」しまうからなのだ。

ヒトは社会的な動物で、集団から排除されれば一人では生きていけないのだから、アイデンティティというのは**集団（共同体）への帰属意識**のことだ。“わたし”は「奴ら」に対する「俺たち」の一部で、「敵」を生み出すのはひとがひとであるための条件ともいえる。

ヒトのオスが遠い祖先から受け継いだ遺伝的プログラムは、世界を内（俺たち）と外（奴ら）に分け、仲間同士の結束を高め、奴らを殺してなわばりを奪うことなのだ。

**「親は無力だ」というのは間違いだ。なぜなら、親が与える環境（友だち関係）が子どもの人生に決定的な影響を及ぼすのだから。**

白人と黒人の生徒が混在する学校に通う黒人の子どもは、「勉強するような奴は仲間じゃない」という強い**同調圧力**をかけられている。仲間はずれにされたくなければ、意図的によい点数を取らず、ギャングスターの振る舞い方を身につけなければならない。